

「花」～識字学級に学ぶ女性の生きてきた道～

1 目 標

- (1) 部落差別が被差別部落の人々の文字までを奪い、生活に不自由さをもたらしたことを理解する。
- (2) 識字学級での学びは、文字を獲得するだけでなく、人間としての権利の獲得にあったことに気づく。
- (3) 識字学級に学ぶ人々の思いや生き方を学ぶことによって、自己の生き方についても考える。

2 展 開

学習活動	留意点
1 文字を知らないと、どんなことが不便なのだろう。	文字を知らないと、どのようなことが不便なのか確認し、本時の学習内容を伝える。
2 「花」の最後の部分だけを読み、おばあちゃんの言葉について考える。	<p><b>資料1 「花」の中の最後の段落 おばあちゃんのつづやき(P90)</b></p> <p>おばあちゃんは、なぜ「若いうちにしんどい思いをして」といったのかを考えさせ、そのことについて理解するための学習をすることを伝える。</p>
3 「花」を読み、おばあちゃんの生きてきた道のりをつかむ。 ・小学校卒業までのおばあちゃんの生活 ・小学校卒業後のおばあちゃんの生活 ・文字を取り戻すまでのおばあちゃんの生活	<p><b>資料1 「花」(P89-90)</b></p> <p>差別と貧困のつらい歴史があったことを知るとともに、文字さえも奪われていたこと、それでも歯を食いしばって生きてきた生きざまをつかませる。</p> <p>(1)～(3)ごとにストップモーション方式で確認したり、グループ活動も考えられる。</p>
4 しんどい生活の中で、おばあちゃんが得たものは何だろう。	文字を知らなかったがために、おばあちゃんが気づいたことや、得ることができたものは何だろう。 (文字を知らない＝マイナスと決めつけるのではなく、知らないがために気づくこと得られることもあることに気づかせる。人のやさしさ、生きていくための知恵などの獲得)
5 まとめ	識字学級で獲得したものは何であったのかをつかませる。おばあちゃんの生き方に共感できるようにしたい。

識字学級との出会いなどに発展させていくとよい。

資料1 「花」 - 識字学級に学ぶ女性の生きてきた道 -

「おばあちゃん、期末テスト、絶対がんばるからね。」

「うん、がんばってやりよ！」と、声をかけたおばあちゃんの顔は本当にうれしそうで、部屋に駆け込んでいく孫の後ろ姿を頼もしい思いで見つめていた。そして同時に子どもころの自分を振り返っていた。

(1) おばあちゃんは、土佐市に生まれ育った。両親のしごとは、地域に古くから受け継がれ、生活を支え続けてきた竹細工の加工・行商であった。兄弟は6人で、おばあちゃんが上のはしであった。両親が毎日、朝早くから夜遅くまでかけてつくった竹製品が遠くまで売りに行っても売れないこともあり、また、兄弟の数も多く、生活は非常に厳しいものであった。小学校・中学校へと通い続けてみんなと一緒に勉強をしたかったが、家の手伝い（子守りや竹細工の手伝い）をしなければならず、学校へ行けない日の方が多かった。たまに学校へ行っても、普段から学校へ行って勉強することができていないので、何を勉強しているのかがさっぱりわからない状態であった。学用品もたくさん必要だったが、親に頼んでも買ってくれなかった。そのため、わからない勉強をするよりも、家で手伝いをする方がましに思えてきて、学校へ通う日はますます少なくなっていた。

あれはちょうど修学旅行へ出発する日のことであった。おばあちゃんは旅行に行くことができず、家の手伝いをしながら、みんながバスで楽しそうに出発しているのを見送ったという。おばあちゃんは、今でもその時のことが忘れられないそうである。「あんたもみんなあと一緒に修学旅行に行きたいらう。ごめんよ。」という母の言葉に、おばあちゃんはとっさに「ぜんぜん行きたくないよ。家で手伝いをするがも楽しいき。」と答えたが、知らず知らずのうちに涙が流れてしまっていた。母の横顔を見ると、母も涙を流しており、二人で泣きながらみんなを見送ったことだった。

結局、ほとんど学校へ通うことができないまま、卒業式を迎えることとなった。しかし、卒業式で名前を呼んでもらったが、卒業証書はもらえなかった。また、みんなが学校生活の思い出にと、サイン帳に寄せ書きをしていたが、文字を学んでいないために書くことができず、大変はずかしくつらい思いをしたが、それも我慢するしかなかった。

(2) ほかにも文字を勉強していないためにつらい思いをしたことが何回もあった。中学校卒業後、定時制高校へなんとか進学することができたが、授業内容をノートに写すことができないため、そのつらさから高校へ行くのがいやになり、就職して仕事をしたほうがましだと思うようになった。とうとう自分から高校を退学し、仕事をするようになった。就職をする際にも、職業安定所で書類に自分の住所・名前が書けなかった。就職先の岡山で実家への手紙を出すときに、同じ土佐市から来ていた友だちの手紙を「私がポストに入れてきてあげる。」と言って、その手紙を預かり、こっそりとそれを見よう見まねで書き写したりもした。結婚して、子どもが病気になるともすぐには病院に連れて行けず、病状が悪化してから近所の人に一緒に病院に行つて

もらったりもした。病院で薬をもらったが、薬袋に書いてある薬の飲ませ方の文字が読めず、薬を飲ませすぎて子どもが危険な状態になってしまったこともあった。子どもが成長し小学校へ通い始めたころ、「お母さん、この字の読み方を教えて。」と聞かれても、教えてやることができずその悔しさから「今、こじゃんと忙しいいかん。待ちよりや。あとで教えちゃおき。」と、怒るような強い口調でその場をしのぐしか仕方がなかった。家でカレーライスをつくっているとき、カレーのルーを買いに行った際、甘口と辛口の文字が読めず、辛口を買ってしまった。その日のカレーライスは本当に辛く思え、たくさんの汗をかいたそうである。このように文字を知らないため、さまざまな不自由さ・つらさ・はずかしさを経験し続けてきたが、それに耐えていくしか道はなかったという。

おばあちゃんたちが住んでいる地域には、同じような思いをしてきている人が他にもたくさんいた。「年をとった今からでも文字を勉強することができるものなら、ぜひともそうしたい。」というような思いがいつも胸の中にあった。そんな時、部落差別をなくしていくための活動や学習をしている中で、他の地域で文字を学びなおす学習会をしている話を聞いた。おばあちゃんたちと地域の仲間は、それを土佐市でも実施してもらおうと、市役所に何度も何度も要求を気長く続けていった。月日はかかったが、やっとのことで昭和 50 年ごろに識字学級を開いてもらえるようになった。1 週間に 1 回、仕事が終わったあと、7 時半ごろから 9 時頃までみんなががんばって、奪われた文字を取り戻すための勉強に市民館に通った。仕事に疲れ、眠たくなるのを必死に我慢しながら勉強を続け、1 字ずつ自分のものにしていった『自分の住所・名前が書ける。いろいろな標識が読める。バスの行き先をまちがうことがない。車の免許証や土木の資格が取れる。』など、だんだんと不自由さから解放され、体の中から湧き上がるような喜びを感じるようになってきた。北代色さんの『夕やけがうつくしい』という詩の思いが、自分のことのように思える。おばあちゃんは、小さいころから花が大変好きだったが、識字学級に通って『花』という文字を学んでからは、『花』という文字の美しさに心が洗われるような感動を覚えたそうである。また、今まで以上に『花』を美しく感じるようにもなり、自分の中に何か新しい世界がどんどんと広がっていくような感じがしているそうでもある。

(3) もし、小さいころ、自分の家が裕福だったら、今のようにがんばれる自分はなかった。小さいころから本当にしんどい思いをし、それに負けないように生きてきたからこそ、部落差別によって奪われた文字を奪い返すことができたのだという。おばあちゃんは、これからの地域を背負っていく若い人たちにも、部落差別に負けないで生き抜いていくたくましい人間になってほしいと願っている。そして、じぶんの“ふるさと”や生きてきた人生を堂々と語れる人間に成長して行ってほしいと心から願っている。

今、自分の進路に向かって一生懸命に勉強している孫にも心の中でつぶやいた。「若いうちに、うんとしんどい思いをして、それを乗り越えて明るい将来をめざしてがんばりよ。厳しい風雪に耐えて、野に咲く花のように……。」